

## 5.9. 異文化雑感

折り有って本学<sup>1)</sup>の「英語教授（つまり非看護分野の『文科系』先生）指導による卒研テーマ」を耳にした。どれもが文化人類学的で学際的な題名に感銘を受けた。『理科系』からは出難いような視点、価値観からの取り組みに期待が膨らんだ。指導された先生方に敬意を表したい。と同時にいやそれ以上に、文化的、文明的に垣根を持たない純真さと、分析力、創造力を併せ持つ若者の特典（それより若くても年上でもそのどちらかが欠けている場合が殆どである）が「研究テーマ」に仕上げ、各人の「大きさ」への豊かな栄養になったと思う。素晴らしいことである。

相対的に長い時間生きてきた私にはそれなりに「異文化との接点」があった。そんな経験から、看護に視野を向けつつ幾つかの思い出を随筆風を書いて見たい。参考になれば望外だし、読み捨てでも良い。「世界には色々な文化が有る、それは良し悪しでは測れない、それぞれが良いのだ」と思ってもらえれば良い。

[国際赤十字博物館](#)

[看護と異文化](#)

[食文化からの経験](#)

[「異文化看護国際研究センター」](#)

[ボーダーレス社会へ](#)

[「異文化を受容する」ということ](#)



### 1. 国際赤十字博物館

ジュネーブの国際赤十字博物館を訪ねる機会があった。スイスは永世中立と赤十字が代名詞であろう。ジュネーブはスイス西部の国際都市で国連第二の本部がある。園内にはヨーロッパアルプス最高峰モンブランや美しいレマン湖を借景に持ち、日本寄贈の孔雀が歩いている。その国連本部の対面にある小高い丘の上に赤十字本部。受付で尋ねて、表通りからあらためて丘陵地下の博物館に向かう。正門前に意味ありげな等身の「石になった人間」像が建っている。「人権尊重」を訴えている。

アンリ・デュナンは商人だった。たまたま仕事で居合わせたクリミア戦争の地でナイチンゲールらの活動、放置された負傷者を耳にし目にして救護活動に入る。赤十字運動の始まりである。「白地に赤の十字」の旗と腕章が目印なのは皆が知っている。「赤い三日月」も正式マークであることを知っている人は少ない。「異文化への配慮」がこのマークを産んだ。赤十字マークはイスラム教徒に「十字軍」を連想させる。その抵抗感を除くためである。最初に心の扉が閉じたら、俗に言う「ボタンの掛け違い」はあとで解くのが大仕事になる。



<sup>1)</sup>家内の勤める長野看護大学は開学七年、卒業生を社会に送り出して三年、新しい基軸を目指す時期にある。「異文化看護国際研究センター」発足、定期的な学報発刊もその一環である。来喫した家内から話を聞き、その学報への投稿を意識して思いつくままに書いたのが本稿である（2003.1）。最終的には投稿資格の問題もあって家内が自分の視点で書き直して記事になったので本稿は日の目を見ていない。

「異文化との対話」と題した国連事務総長 Kofi Annan の講演からその一部を引用したい。『… 過去の歴史から学ぶことは多い。その一つに「限りなく多様な文化が存在する一方で、受容と自由の精神に発する万人共通の文化も存在する」ということがある。それは「異なる」ことを排除せず、文化の多様さに価値を認め、宇宙根源的な人権を保障し、あらゆる人がそれぞれの意見を持つ権利を認めることで成り立つグローバルな文化である。それは「多様な異文化」が決して恐れるものではなく、価値あるものと信ずる文化である。…』

## 2. 看護と異文化

素人目だが「看護」は文明（知識活動の表われ方）ではなく、文化（精神活動の表われ方）と言えるのではないか。「人」が対象だからそれは当然である。したがって「より良き看護」は「異文化のより良き理解と実践」から生まれ育つ。「異文化」と言っても大小がある。大は世界規模から小は地域社会、家庭規模、究極的には個人レベルに至る。極論すれば「人との付き合い」は全て「異文化との接触」と言える。

世界規模における最近の「異文化摩擦」の好例が「テロ戦争」であろう。「異なるものへの不信と不安」が「文明と言う手段」を手にした時に犠牲者が生まれる。が、私は楽観者で居たい。「北風より太陽が強い」と思いたい。「不信と不安」と言う心の外套を脱がすことのできるのは北風ではなく太陽の筈である。



個人レベルをも対象にする「看護」も同じことが言えるのではないか。看護者は太陽でなければいけない。北風であってはいけない。二年前に聞いた看護実習生の例を思い出す。老人施設の奉仕活動に参加した学生に「涙を流して別れを惜しんだ」一人の老婆と、「老いることの悲しみ、それを癒すことの大事さ、自分にも出来ること」を肌で学んだ若い実習生との「交流」は（老人）看護の原点を示しているように思う。

昨今、看護者への期待、ニーズが高い。特に、規模の大小を問わず異文化の壁を乗り越えてくれる人が求められている。ジュネーブには国連の難民高等弁務官事務所もある。緒方貞子さんがかって代表を務めた機関である。そこに今働く旧友を訪ねた。長野松本出身の人である。異国の地での勤務、異国文化との接点が話題になった。難民問題はまさに異文化間の人権問題である。この機関に限らず国連の他の機関でもあらゆる職種がある。「異文化への理解と（少しでも）愛情が有れば」誰にでも働き場所と貢献できる場所が開かれている。看護の視点と重なるものが多い。そこに使える技術（文明）の支えがあれば鬼に金棒である。読者の中にそんな異文化への関心を持つ人が居ても良い。それも素晴らしいことである。

## 3. 食文化からの経験

戦後育ちの私に食料は宝だった。初の外国生活で「食べ残す」常態に眼を見張る。しかもそれが「上品」なのだと聞いて驚いた。「煮たトマト」にも会う。トマトとは水温で冷やして生で食べる物と思っていた。林檎もクックされて出てきた。後年バナナの天婦羅に出会った時以上の驚きだった。そこでは野菜も果物も「新鮮」であるより「傷んでいるのが普通」の文化だった。海苔若布類を Sea weed と訳せば雑草をイメージし、Raw fish と言えば蠅が飛び交うような傷んだ魚を連想する文化だった。Sea vegetable, Fresh fish と訳した先輩に今も感心している。「活きた新鮮な鯉を」と勧められたニュルンベルクのレスト

ラン。まさかとは思いつつ「鯉こく」「鯉の洗い」を想像した。が、水槽の鯉は厚い油の衣付きで食卓に出てきた。

外に出て始めて口にするものも少なくない。例えば鳩。私など平和の使者を食べるなんて、と思うのだがエジプトでは人気料理。接客用でもある。犬を食べる、と欧米の人は中国人に眉をひそめるが牛豚類を食するのと何が違うのか。もっとも中国人は「足(脚)のあるものは(机以外)何でも食べる」とも言われるが。牛豚類は家畜だから許される、と言う人がいる。がそれらを神聖視する宗教、人達もいる。文化である。



動物愛護を標榜する「毛皮反対派」がいる。多くは牛豚類を食する人種に属する。彼らはベジタリアンだろうか。ベニスの商人ではないが、皮を取らずに肉だけ食せるとは思っていないだろうに。そのベジタリアンの多くも魚類は良いと言う。分らない。

私は馬刺しが好きである。生姜の甘垂れを好む。好きな山から疲れて降りてきて馬を見ると「馬刺しが歩いている」様に見える。がその話題は外国では口にしない。欧米は犬同様に馬を慈しむ社会である。「馬を食べる」などと言うと非難の視線が見え見えだから。

「食文化」は多彩である。私は料理の良し悪しは言わないことにしている。好き嫌いは言う。人に依って好き嫌いはあっても料理自体に良し悪しはないと考えているからである。食文化に限らず「文化は多様」である。自分の文化、論理で他を排除しない様にしたい。良い意味で他人は他人、我は我である。

#### 4. 「異文化看護国際研究センター」

私の知人でやはり別の国連機関で働く人が居る。彼は生来人間嫌いで、少年時代「考古学」に憧れたと言う。「人と付き合わず、物だけを相手に過ごせるから」だと言う。その人間嫌いが選んだ職は自然科学で、それを現在「未開国民の生活質向上に貢献する」ことを目標に「生活水確保への技術寄与」に自分の学んだ自然科学の知識と経験を活かしている。職場を通して異文化との接点にいる。その彼が最近私に語った。「『考古学なら人と付き合わず、物だけを相手に過ごせる』と考えるのは間違いだった。『考古学には人間味が大事、語り部から活きた文化を聞き取るのに欠かせない』と愛読する司馬遼太郎の本にあった」と。それが今では素直に聞けると彼はつぶやいていた。



彼とは違って看護を目指す人は生来人間好きなのだと思う。本学「異文化看護国際研究センター」は異文化圏の看護医療を知ることによって自文化での看護の質を高めると同時に異文化圏の看護に寄与することも目指していると聞く。立派なビジョンだと思う。看護技術と言う文明も必要だがそれ以上に看護文化を知り、より質の高い看護を目指して欲しい。それは必ずしも世界規模の異文化に限らない。第一回に書いたように異文化は自社会内にも家族にすらある。そんな至る所で看護は必要でありこれからも求められている。人間好きの人には天職ですら有り得る。素晴らしいと思う。

医学の進歩で寿命は伸びた。それはそれで良いことだ。が時として医学の限界も耳にする。近年、

東洋医学が再評価されてきているのも無関係ではないだろう。「気の療法」とか「鍼灸療法」が話題になるのもそこには西洋医学以上に「文明（技術）」と一体化した「文化（心）」の癒し方法論があるからではないか。

再び赤十字博物館に戻る。館内に入ると先ず「人間の尊厳を尊ぶ」古典の言葉が六カ国語で書かれている。曰く「自分がして欲しい様に他人に施せ」「自分が欲しないことを他人にするな」「（戦争）捕虜は神からの預かり物、家族同様に扱え」等々。要は「相手の立場に立って」と言うことだと思ふ。別の言い方をするなら「相手の文化を受け入れて」である。看護はそれが実践できる場であり、貢献できる場であり、達成感の得られる場であろう。

## 5. ボーダーレス社会へ

ヨーロッパでは今欧州連合の実験が進行中である。2002年始めから通貨が共通になった。域内での往来は簡単になり、国境での旅券検査は殆ど無くなった。物の流れも垣根が低くなった。職場も大幅に自由化されて、欧州片田舎のウイーンにも全欧州の求人情報が市民に開放されていると言う。職場の自由化とは人の流れの拡大を意味する。異国の人が職場に入ってくるのである。医療施設も例外ではない。医師、看護師が異国の人を診ている。域外の人も少なくない。欧州はそれなりに文化が共通だから可能だとの見方もあるだろう。が、その連合域内にはラテンあり、ゲルマンあり、さらには旧中東欧のスラブ諸国、アジア系のハンガリーをも含める拡大欧州が2004年には発足する。ボーダーレス社会の実験がさらに進む。異文化との共存を避けては通れない。この欧州連合に参加していない国が幾つかある。イギリスもその一つである。イギリスは日本が明治維新以来色んな面で模範とした国である。現在のヨーロッパでそのイギリスは「ちょっと外」の感である。



ハブ空港と呼ばれる国際空港がある。例えばドイツのフランクフルト。他の大陸との間の長距離便が多く離着陸し、大陸内の他の都市へと繋いでいる。言わば大陸の窓口である。それがロンドンでないことを言いたい。アジアの地理で言えば東京でなく北京や韓国仁川に相当する。今がそうだとは言わない。島国イギリスが今の欧州連合の「外に」なりつつあるようには、日本が「アジアの外」になって欲しくないのである。その為には空港の整備以上に、「文化の門扉を開く」ことに先駆者でありたい。ボーダーレスの世界観にアジアの他国の若者に先駆けて飛び込んで欲しい。それは異文化を受容することであり、同時に自己のアイデンティティを明確に持つことである。21世紀は学際的な分野に今学び、これから社会を担う人達の手委ねられている。

前回触れた私の知人は、「今後の国際貢献のために」と題して提言をしている。一部紹介したい。曰く『日本は人的貢献が少ない、会議でも無口で提案がないとしばしば耳にする。が、それは意見がないからではなく（言葉の所為で）発言の機会を逃すからである。古来我が国の教育では、読み書き算盤が大事な教科で「話す」が抜けていた。初中教育に「自分の考えを話す」教科を組み込めば十年後、二十年後に状況は変わるだろう』と。本学「異文化看護国際研究センター」はそんな実践の場を学生に供することも大事な使命なのではなかろうか。

## 6. 「異文化を受容する」ということ

「異文化を受容する」とはどういう意味なのか。私なりに考えて見たい。もう一度、国連事務総長

Kofi Annan の講演から引用する。2001年ノーベル平和賞を受章した前後の講演である。『... それは「多様な異文化」が決して恐れるものではなく、価値あるものと信ずる文化である。過去の戦いの多くは、自分とは異なる人々への恐れが起因になってきた。かかる脅威を取り除くには、相手に耳を傾ける話し合いを通してしか方法がない。多様性を認めることこそ異文化間の対話の基礎であり、対話を必要とする理由である。... 自分にないものを嫌悪することなく、自分を慈しむことが出来るのです...』

私なりの理解では「それぞれの文化、しきたりを認めること、自分とは異なるがそれはそれとして排除しないこと」であり、「この世に唯一の規準は有り得なく、万人それぞれの考え方、判断基準の存在を認めること」である。「私はこう思うがあなたの考えも理解できる」とは言えても「あなたは間違っている、正しくはこれこれ...」とは文明的にはともかく文化的にはなまなか言えないのである。

「思いやり」と言う。「心遣い」と言っても良い。異文化圏の人への思いやりは意味深い。が、易



しくもある。例えば旅券窓口。国際会議の受付でも言い。いろんな宗教文化を有する多くの人を前に、用紙に記入の名前を見て「クリスチャンネームは？」と無差別に問い返すのが無神経なのである。「ミドルネームは？」と問えば済むのである。先に食文化に触れた。その延長で言えば、イスラムの人との会食で「さり気なく」ポークを避けるのも一つである。逆に彼らが「美味しそうに鳩を食す」姿に眉をひそめないのも思いやりだろう。要は「相手も自分と同じ文化」と無意識に思い勝ちな処に落とし穴がある。

国連に限らず「世界の貧しい人たち、未開国民への援助」と声高く訴えられる。「貧しい、未開」と誰がどんな規準で分類するのか、と最近疑問に感じている。食糧不足か、人権問題か、それとも...。例えば高地民族・極北民族への援助。「貧しい彼らを助けるため」の援助がさらに彼らを高地へ、北方へ移動させる（強く言えば「駆逐する」）例を歴史は示している。彼らの文化は援助する側の文化と違い得るのだ。援助が悪いのではない、文化を解しない援助が成功しないと言いたいのだ。「あなた方は貧しいのだ、だからこうしてああして...」の援助は「相手の立場で」の判断、思いやりに欠けていると言いたいのだ。誤解を恐れずに大雑把に一括するなら「一神論」ではなく「多神論」こそこれからの「異文化共生時代」のよすがではないのか。